

熊本城と丸亀城の瓦

熊本城調査研究センター 真鍋 貴匡

- 1、香川と熊本のつながり
- 2、丸亀城の紹介と大手町地区の発掘調査成果
- 3、高松城と丸亀城の瓦の展開
- 4、熊本城下の瓦
- 5、まとめ

1、香川と熊本のつながり

①古墳時代（石棺の需要と供給）（第 1 図）

古墳時代中期後半（1650 年前）に阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が熊本の北部より香川に供給
→観音寺市丸山古墳・青塚古墳、高松市長崎鼻古墳
古墳時代中期～後期にかけて、石棺材として熊本から畿内へ供給

②尾藤家と加藤家（第 2 図）

天正 14（1586）年に讃岐国宇多津を所領していた尾藤知宣の改易後、秀吉より尾藤の武具
調度品など一切が清正に与えられ、そこに描かれていた尾藤の家紋であった桔梗文も加藤家の
家紋となる。

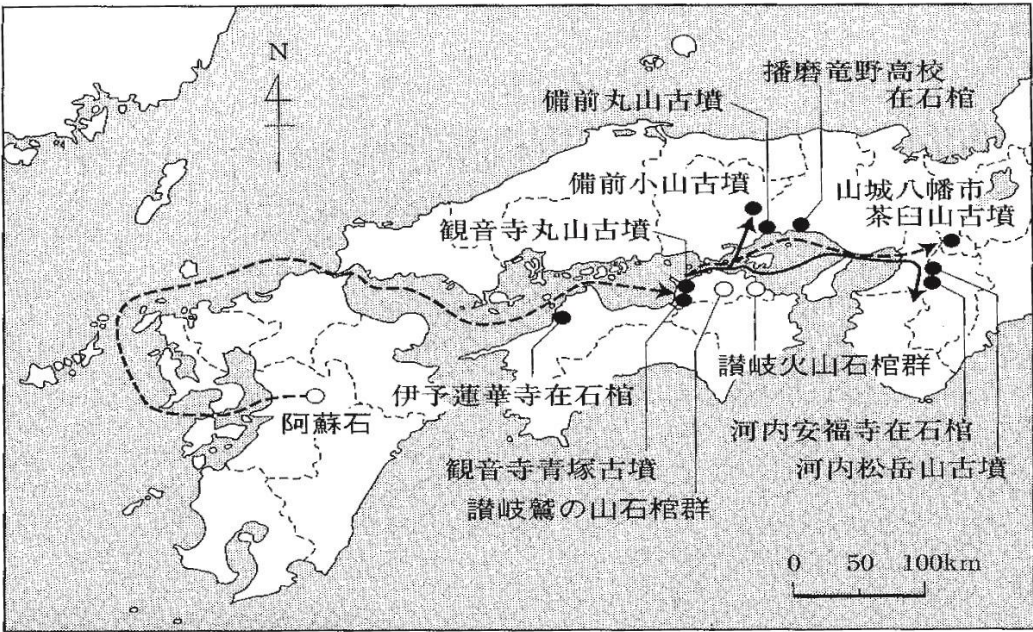
③明治（連隊の建物設置、乃木希典、西南戦争出兵）

歩兵第 12 連隊の設置（創設 1875 年〔明治 8 年 9 月 9 日〕）
→丸亀城北側一帯を明治 4 年以降に買収し、連隊建物設置（明治 8 年に建物完成）

乃木希典
→西南戦争に従軍
→善通寺第 11 師団の初代師団長

④海

瀬戸内海と有明海
→内海、漁場が豊か



割抜式石棺の分布

第 1 図 石棺の移動 『香川県の歴史』より抜粋



第 2 図 調度品に描かれた折墨と桔梗 『加藤清正』生誕 450 年記念展より抜粋

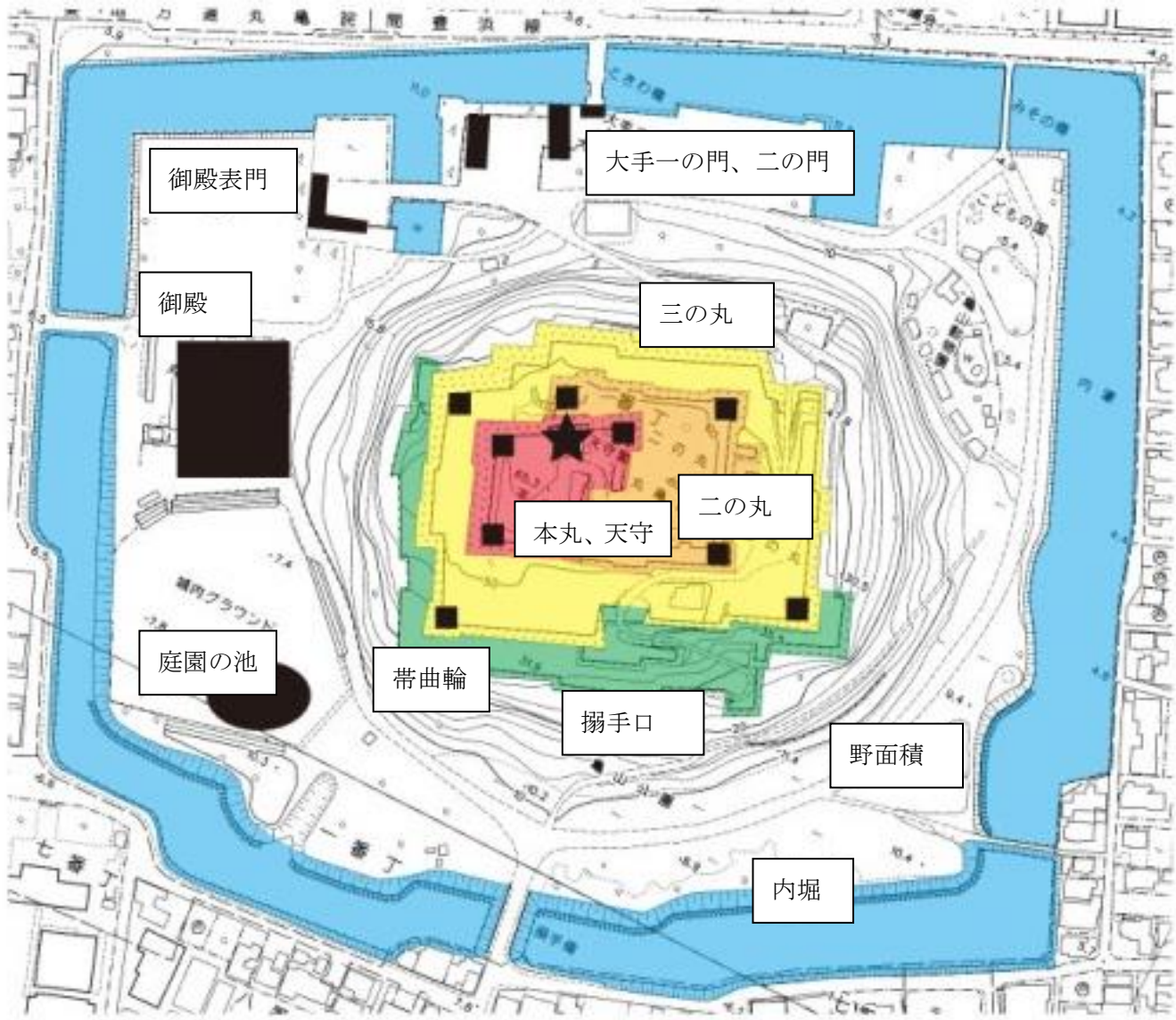
2、丸亀城の紹介と城下の発掘調査成果

丸亀城の概要

国指定史跡（昭和 28 年） 内堀内 204,756 m²が指定範囲
重要文化財：天守（昭和 18 年）、大手一の門・二の門（昭和 32 年）
場所：香川県中央の丸亀市の亀山（標高 66m）
城の形態：平山城
石垣：高石垣が四重にめぐる、総高約 60m
堀：内堀北面のみ石垣だが、それ以外は、土羽、外堀も土羽。
石垣：切石積み、野面積み 岩質：花崗岩

藩主

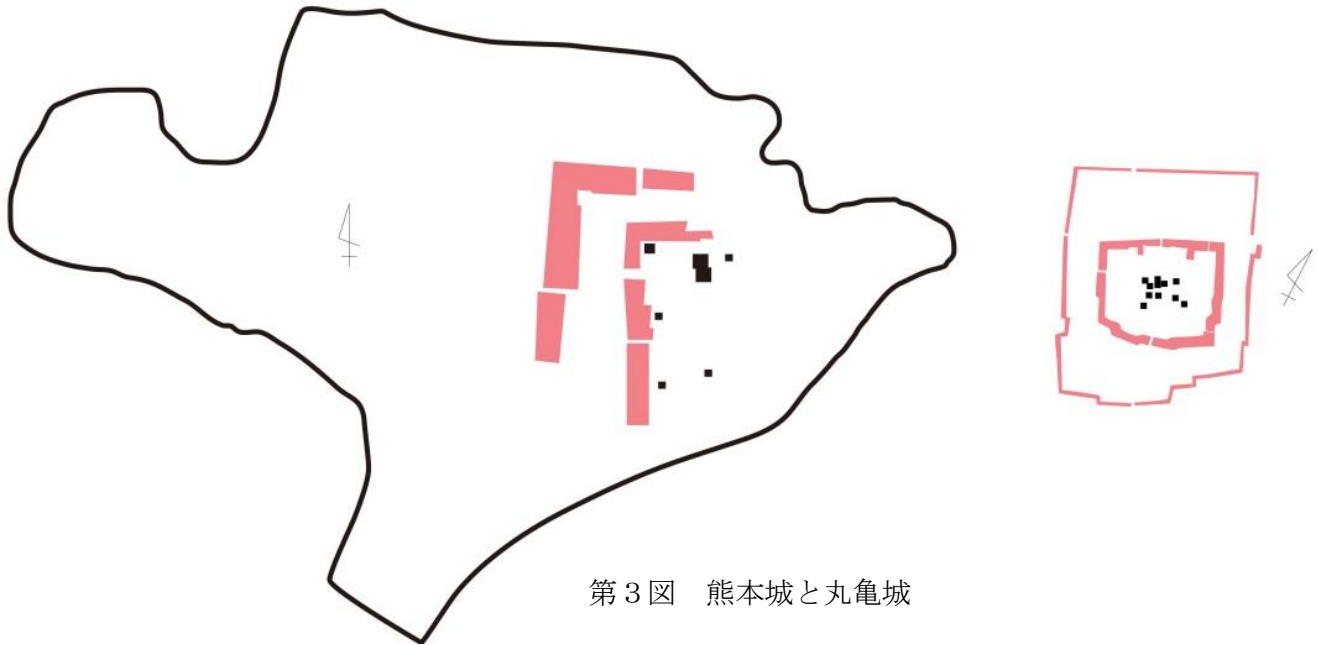
- ①生駒家（天正 15（1587）～寛永 17（1640））
丸亀城築城開始、一国一城令により一旦廃城
お家騒動により、出羽国に転封
- ②山崎家（寛永 18（1641）～明暦 3（1657））
天草富岡城より山崎家治が領主となる
正保絵図によると、本丸・二の丸部分の天守・櫓・石垣が完成
現在の丸亀城の姿となる
お家断絶
- ③京極家（明暦 4（1658）～明治 2（1869））
播州龍野より京極高和が藩主となる
大手口を南側から北側へ移動
港の整備



第 4 図 丸亀城の範囲 丸亀市都市計画図を縮小し、加工

丸亀城にまつわる伝説

- ・人柱伝説
- ・抜け道（三の丸井戸）
- ・二の丸伝説



第 3 図 熊本城と丸亀城

城下（大手町地区）の発掘調査成果

高松地家裁丸亀支部庁舎の建替え工事に伴い、平成 28 年 6 月～10 月の六ヶ月間の発掘調査を実施した。調査対象地は大手よりやや外側だが、多度津藩の御用所や邸宅、多度津藩の家臣が居住しており、比較的身分の高い人物の居住エリアである。

丸亀城城下の発掘調査は少なく、今回の調査で町割りの復元材料や、屋敷地内の配置、食生活の一部、などがわかってきた。また、明治以降については、県内でも調査事例のない連隊建物の調査であり、現在まで残っている配置図や古写真・設計書などとも照合できる貴重な調査となっている。

今回の発掘調査では、17 世紀後半～19 世紀中ごろまでの江戸時代の遺構、明治 8 年～昭和 28 年までの近代の遺構を確認している。

近世

廃棄土坑、区画溝、井戸、柱穴、トイレ

廃棄土坑：17 世紀後半～19 世紀中ごろまでのゴミ穴

→瓦、各種陶磁器、瓦、土師質土器、魚骨、貝類など

当時の生活の様子を復元

区画溝

→絵図に描かれた町割りと対照＝当時の景観復元

瓦

→通常の集落でも出土する瓦、希少なものとして家紋瓦が出土している。

トイレ

→土師質の甕を転用、土師質の風呂桶を転用したものがある。

近代

歩兵第 12 連隊建物の外壁基礎（3 基）・礎石（束石）・井戸（1 基）

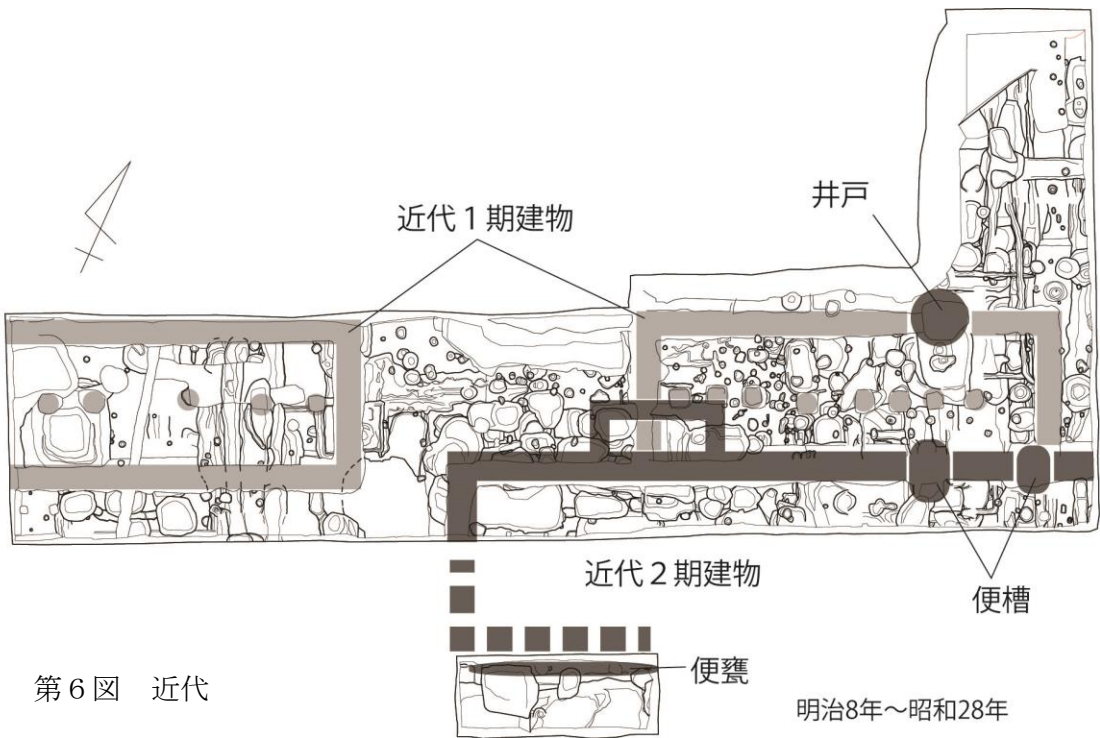
近代 1 期建物（明治 7 年～明治 26 年ころか）

幅 1 m×深さ 1 m の溝を口の字に掘削し、北側に 2 箇所ほど突出部（入り口）を設ける。溝底に一抱えほどの石材を 3 列を基本として置き、上部には玉石を敷き並べる。そして本来は、この上部にレンガの外壁が載る。この溝は外壁の沈下を防ぐための基礎構造である。屋根を支えるものに、建物の梁行きの中心軸線に屋根支えの礎石も見つかっている。

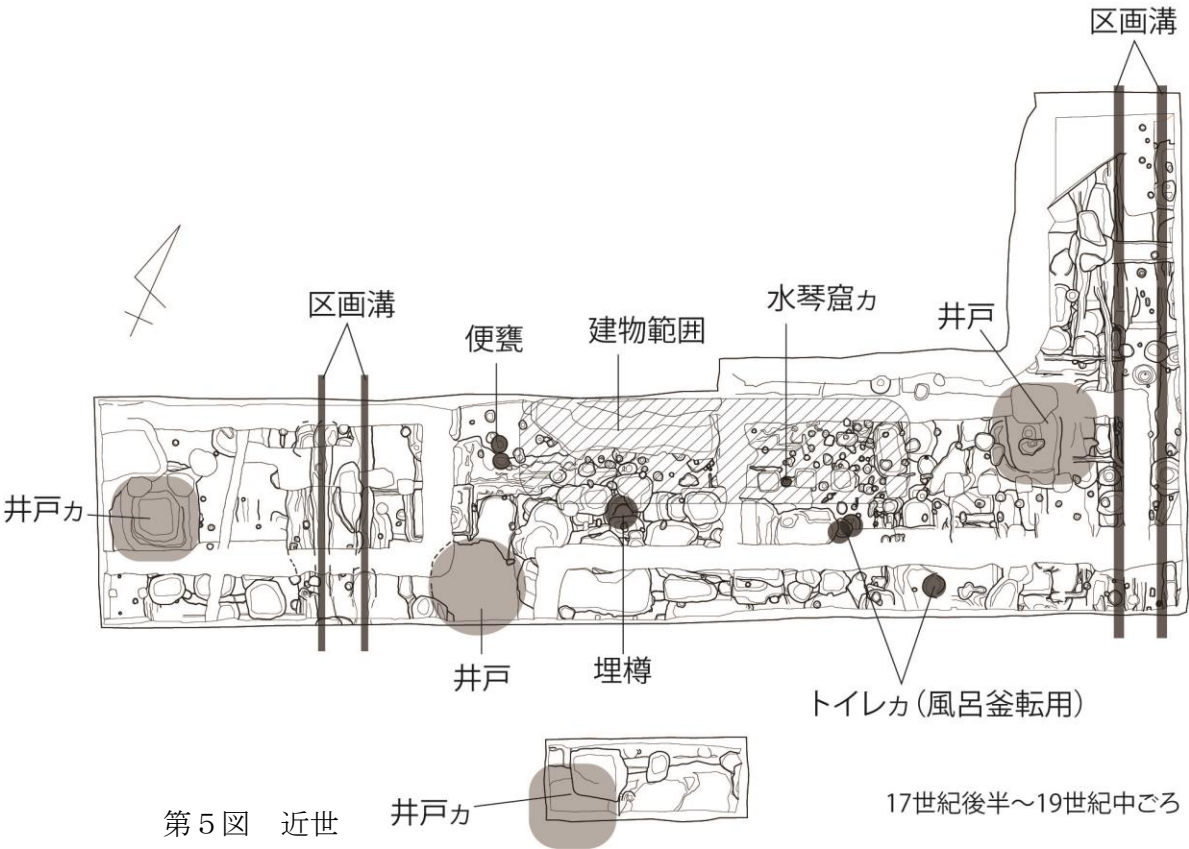
近代 2 期（明治 26 年か～昭和 28 年）

幅 1 m×1 m の溝を口の字に掘削し、北側の二箇所に突出部（入り口）を設ける。溝底に一抱えほどの石材を 3 列を基本として、上部には玉石を敷き並べる。そして本来は、この上部にレンガの外壁が載る。この溝は外壁の沈下を防ぐための基礎構造である。屋根を支えるものに、それより上部構造は不明。建物の礎石（束石）を設置。漆喰で固めた便槽。漆喰の樋と瓦質の土管が連続する排水施設。

丸亀城城下の瓦



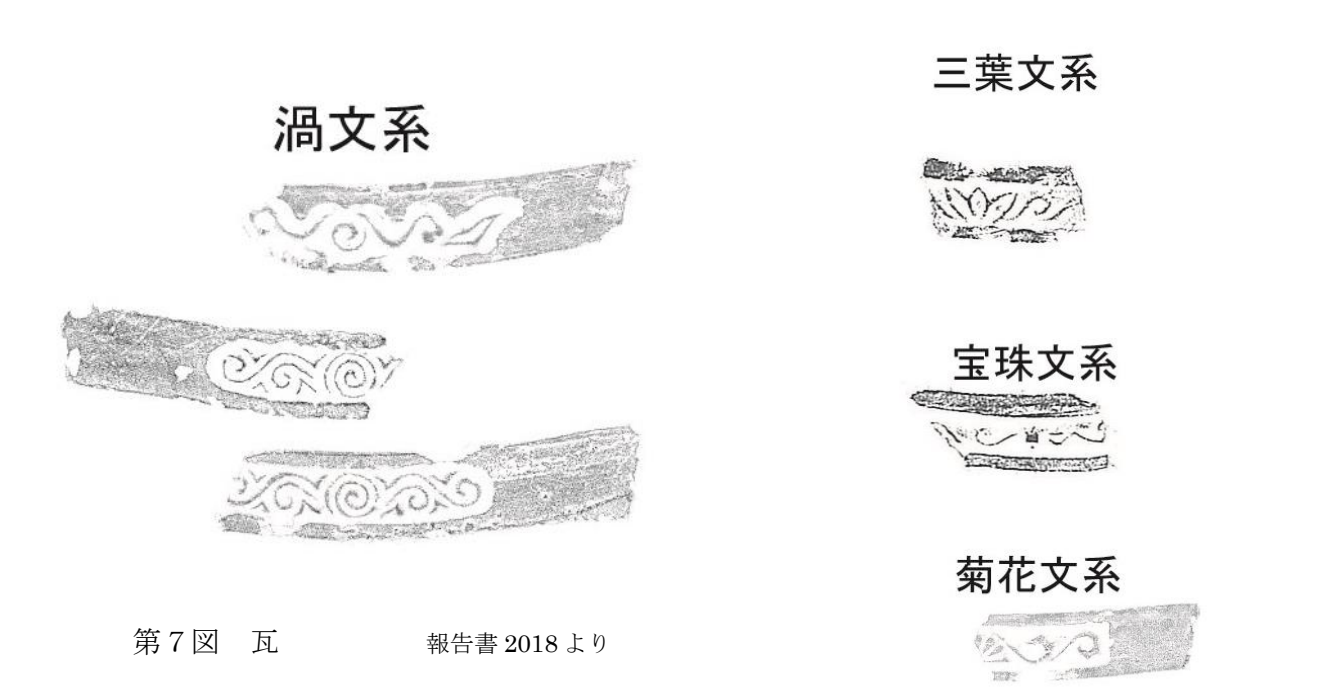
第 6 図 近代



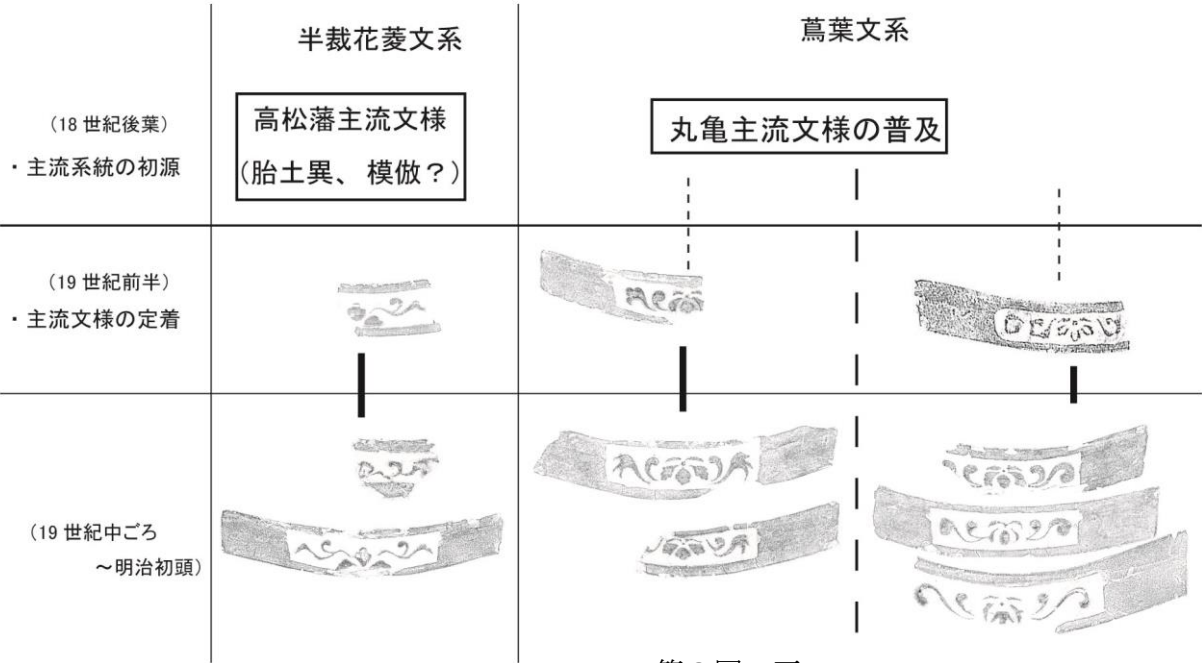
第 5 図 近世

城下の発掘調査では、多量の陶磁器のほかに、屋根に葺かれていた瓦が出土する。平成 28 年度に実施した発掘調査が平成 29 年度に整理が行われ、報告書としてまとめられている。その成果により、丸亀城城下の瓦は、大きく六種類（第 7 図・第 8 図）の文様系統があることや、その変遷がわかっており、まずは丸亀城城下の瓦をみておく。

- ・初期には特徴的な瓦
→渦文系：瓦範が長方形ではなく、文様に沿った掘り込みをしている
他地域に似た文様がない＝地域独自
- ・家紋瓦
山崎、京極、家臣の家紋瓦が出土
→四目結文、隅立四つ目、扇、丸橋
- ・地域の主流となる中心飾の出現
蔦葉：中心飾りが下向きの五つ葉
→18 世紀後葉～19 世紀に入る頃に出現
- ・明治以降
別の文様に変化
→確証はないが「菊間森貞」の刻印の入った瓦があり、愛媛県から供給された可能性がある。
→連隊の建物建築による多量の需要の発生によって、外部に頼らざるをえなかったと考えられる。
→18 世紀後葉に出現した蔦葉文も、現役瓦にもみられることから、在地生産が途切れていない



第 7 図 瓦 報告書 2018 より



第 8 図 瓦 報告書 2018 より

4、熊本城と城下の瓦

熊本城と城下の瓦を、発掘調査成果を集成し、現役瓦に連続する文様の系譜の探索行った。熊本城の瓦文様は多種多様なものがあり、すべてを取り上げることはできないので、特徴的な瓦を挙げて、熊本城の瓦、そして、近世から近代へと連続する瓦の文様の系譜をみてみたい。

第 1 期 a.古城、b.新城～加藤清正（1598～1611）、c.加藤忠弘（1611～1632）

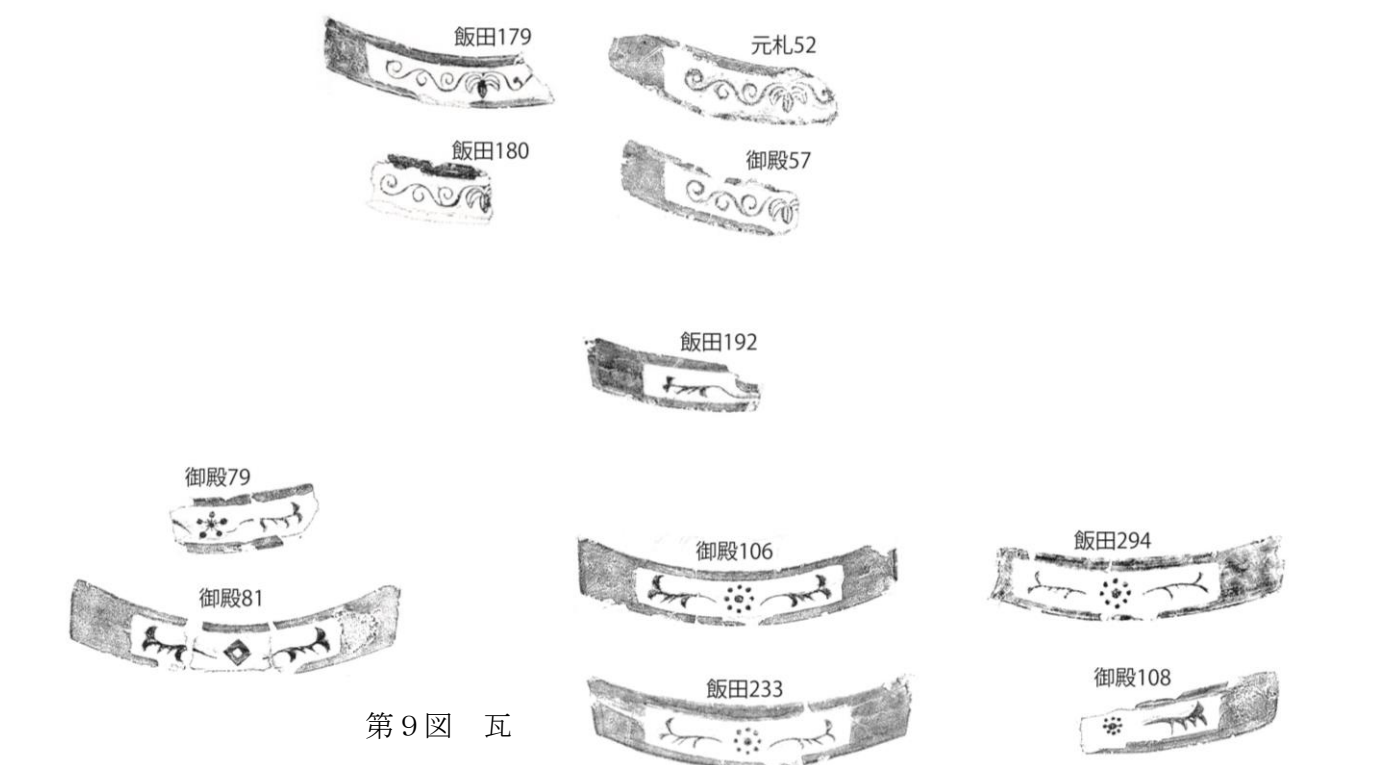
- 他の城からの供出 or 流用 or 転用、自前生産は少数
- 熊本城と他の城との同範関係があるもの
- 平山瓦窯（水俣城に供給）と同範瓦
- 八代城藩主の瓦
- 加藤家の家紋が主文様に採用される
- 以降、細川家入城まで家紋瓦のみが採用。それまでの唐草の文様も一新される。

第 2 期 細川家（1632～1871）

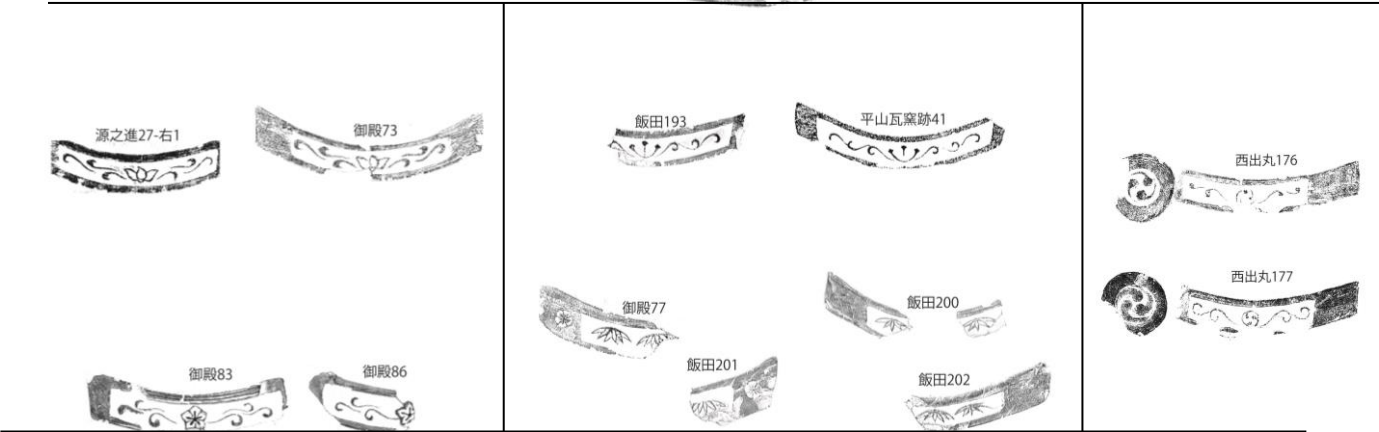
- 細川家の入城、瓦も細川家の家紋が主文様に採用される
- 工人集団はそのままだが、中心飾りの文様だけでなく、唐草の文様も一新される。
- 城内（特に本丸）と城下では、瓦の採用に厳密な線引きがされている可能性

第 3 期 明治以降

歩兵第 13 連隊の設置に伴い、煉瓦造の建物が林立するが、瓦はそれまでの近世の系譜とは異なる、全く新しいものになる（第 11 図）。産地も刻印筑後柳川、現在の福岡県で生産されたものが大半を占める。城下でも、その傾向にある。ただし、少数だが近世からの系譜の瓦もあり、小規模ながら生産されていたようだ。



第 9 図 瓦



第 10 図 瓦

5. まとめ

香川→近世後半（18c 後葉～19c 初）に出現した瓦の中心飾りが主流となり、現代まで継続
高松藩の領域→半裁花菱、丸亀藩の領域→蔦葉

熊本→いつごろ出現したか不明だが、中心飾りが三巴のものが近世末には主流になり、明治には少数派として、残存 熊本藩の領域→三巴が主流となったのか？

→他県でも近代に主流となるが見られることから、広域の流通網が発展した結果？、範を流用して生産？

明治以降の、瓦の生産は香川と熊本では対照的である。流通網や生産力の違い、そのほか需要と供給などさまざまな観点から、考えていく必要があるだろう。



第 11 図 瓦